

アトモスフィア

研究現場に余裕を

西野 徳 三*

最近の大学のいわゆる研究費は年間30万円ほどであると聞く。科研費などの資金が得られない研究室は朝からセミナーを行わざるを得ないとも聞いて久しい。

また、事務機能を含め研究の支援体制は年々狭められ、教員にしわ寄せされつつあるうえ、会議等も増えて研究や教育に充てる時間も極端に少なくなったとも聞く。ポスドクを戦力とするアメリカにまねて、日本での研究の中心的戦力であった博士後期課程を重点化・拡充し、併せてポスドクを一般化する計画も進められはしたが定着せず、逆に当時よりも博士後期課程への進学者は少なくなったようである。その定員枠を博士前期課程に振り替えつつあるという話も聞く。

私が定年を迎えた8年前はそれまでの国立大学の体制が残っていたが、その頃から急速に効率が重視され、成果を常に出し続けなければ評価が得られないシステムになったようである。大学の基礎研究はかなりの部分余裕の中から生まれてきたものが多いように思われ、現在発表されつつある成果は過去の実績を基にしたものが多いのではなからうか。数年先、さらに十数年先に発表すべき蓄えを生み出す研究費や時間などの余裕がなくなり、その結果、研究の厚みも深みもなくなると危惧するものである。

私の個人的な経験を、但し、工学部に移ってからは応用研究が主となり基礎を中心とすることが多い当学会の会員には参考とならない話かもしれないが述べてみたい。研究費に関しては、人とのつながりで他学科の大型予算の班員となり、研究費が付いたために行なった研究がそれなりの成果に結びつき、今に至っている。テーマを追求する為に獲得する研究費以外にも、余裕のある資金により研究が広がることもある(極端に言えば立花隆氏がどこかで述べていたが、ムダ弾をどの程度撃てるかということかもしれないが、言い過ぎか?)。

定年退職後私立大学へ移ってからも、ほんのわずかな公的資金が先方から提供されたことを基にして研究班を組織し、私大の組織や個人ではできない実験が共同研究という形で実施され、大きな発展につながった経験もある。

時間的な余裕に関しても、他分野の人と付き合える時間、社会の人と話ができる時間、当面関係ない会合や学会へ出席できる余裕は、すぐ自分の研究に結びつくものでなくとも何かに結びついてきたように思われる(好奇心が旺盛だっただけか?)。

研究資金なし、余裕なし、戦力なしの状態では、たしてこれまでのような研究成果が生まれ続けるのか心配になる。

他方、研究費は一時よりは獲得しやすく、潤沢であるという話も一部見聞きする。画一化したこれまでの平等な社会から、スペクトルの広い、ヘテロな社会に移ってきたとも思われ、それはそれで歓迎すべきと思われる。しかし、そのような一部の研究者も最初から先端の研究に繋がったわけではなく、指導者レベルの余裕の中で次のステップに進んできたケースがほとんどではなからうか。研究の裾野を広くしておくところから研究の芽が出てくるように思われるがどんなものであろうか。

それでは今どうしたらよいか。研究費の増加をと言ったところで現実的ではなく、妙案があるわけではないが、少なくとも支援体制を今の枠の中できちんと構築していけないものであろうか。これを進めるための資金は、研究成果のしっかりした評価体制を作り、メリハリのある配分によりそこで生まれる諸々の余裕資金を回せないものであろうか。科研費等の審査に関しては人数もかなり増え客観的になったようであるが、それらの研究成果の評価はどうであろう。最近の競争的資金の事後評価を頼まれることがあり、「目的とした結果が得られなかった」と書かれている報告書も散見されるが、その評価結果がどう反映されているのか聞いたことがない。

色々思いをめぐらせてみるに、似たような逆境にあってもなお立派な成果を上げてきたのが我々の先人たちである。この先、何らかの工夫がこらされ、研究を推し進めていく解決方法が生まれることを信じ、立派な研究成果が上がるような社会になることを期待したい。

*東北大学名誉教授、(財)日本化学研究会常務理事